

Moodle を用いた日米 Map Project

- 異文化間交流から社会貢献活動へ -

新村知子*1・桑村佐和子*1・山岸倫子*1・高原浩之*2
 Email: shimmura@ishikawa-pu.ac.jp

*1: 石川県立大学生物資源環境学部 教養教育センター

*2: 石川県立大学生物資源環境学部 生産科学科

◎Key Words Moodle, 異文化間交流, 社会貢献

1. 日米Map Projectの目的

今回の取り組み（日米 Map Project）では、石川県立大学の近辺にある二つの地区のまちあるきマップの英語版を、日米の同世代の大学生たちがオンライン上で共同作成し、その後の合宿形式で共同学習・交流を行いながら、2地区への贈呈を行った。これらの活動を通して、それぞれがお互いの言語、社会、文化など、多くのことを学び合うと同時に、社会貢献を行うことを目的としていた。

この英訳活動を行うにあたっては、石川県立大学の Moodle 上のフォーラム（掲示板）で両校の学生が意見を交換できるように設定した。フォーラム上では英訳作業だけでなく、合同合宿のための相談等も行われた。本稿では、Moodle を活用して進められた日米 Map Project の概要を報告し、このような活動を通して社会貢献を行うことの意味を考察する。

2. Moodleのフォーラムの使用法と目的

2.1 日米Map Project前史

本プロジェクトが始まる前に、石川県立大学では2年次の必修英語の授業（新村担当）の中で、アメリカ合衆国インディアナ州にあるローズハルマン工科大学の学生とのオンライン上でのメッセージ交換を2007年から毎年実施してきた（アメリカ側担当クラーク氏）。日本文化を学ぶアメリカ人学生と英語を学ぶ日本人学生が、Moodle のフォーラム上において小人数で直接やりとりをする活動である。この活動により、学生たちは同年代のパートナーと、一対一でフォーラムを使って実際のコミュニケーションをとり、中学・高校から学んできた英語を使ってコミュニケーションを行った。その後のアンケート結果によれば、彼らの多くが「初めて自分の英語が本当に通じることを知った」と感じ、大きな感動と達成感を体験した⁽¹⁾。

この経験をもとに、オンライン上だけでなく学生たちに国際的な生の異文化体験をさせたいという意向で、ローズハルマン工科大学から9名の学生を石川県立大学へ送る計画が企画され、2010年2月に2泊3日の日米の学生文化交流活動が行われた。この合宿を企画する際、アメリカ側の責任者であるクラーク氏から「合宿の間、3日間楽しく過ごすだけでは、学びとしては不十分なので、合宿をする前に日米の学生と一緒に何かを作り上げ、共に学んだという達成感を持てるタスク

を考えたい」と提案があった。この点について議論を重ねた結果、大学の広報ビデオの英語字幕を作るというタスクが選ばれ、日米各9名の学生たちをこれに組み合わせた。合宿が開始したときには、事前にオンライン上で一緒に作業している学生たちは、実際に会ってからスムーズに話ができて、合宿で行った活動もとても実りの多いものであった。

2.2 日米Map Projectの企画

この「オンライン上の共同タスク活動+合宿」活動はローズハルマン工科大学でも評価され、2012年2月に、前回の2倍以上の人数になる20名の学生を石川県立大学へ送る計画が企画された。学生数が多くなることもあり、教員数を増やし、企画立案段階で今回はさらに社会貢献という要素を取り入れたプロジェクトにしようという提案がなされた。

具体的には、石川県内のまち歩きマップ英語版を作り、これを贈呈することを目標にすることが提案され、これを中心にすべての活動が計画された。

英語版を作成するマップは、石川県立大学の近くの二つの地区、具体的には、野々市市内で古い街並みが残っている本町地区と白山市の中でも歴史と伝統的な部分が豊かな鶴来地区のものである。どちらも、全国的には知名度の低い小さな地域ではあるが、歴史、文化的な視点から興味深い場所が多いことから、外国人観光客にとって魅力的な地域である。石川県も観光に力を入れており、これらの地域を英語で紹介できれば、社会貢献につながると考えられた。

勿論、学生たちの学習のためでもあった。このプロジェクトに参加するアメリカ人学生は日本文化を学んでいる学生達であったため、地域のことを知ることを通して、日本の文化に触れることが可能である。一方、日本人学生にとっても日本文化や地元の歴史・地理について新しい視野から学ぶことができ、双方の学生たちにとって学ぶことが多いと考えた。

今回のプロジェクトに参加したアメリカ人学生は20名、石川県立大学の学生は25名である。また教員はアメリカ側2名、日本側4名で、全体で50名以上の参加者となった。最終的な合宿は2012年2月26日から28日に2泊3日で行われた。

2.3 日米Map ProjectでのMoodleの活用方法

日米 Map Project では、Moodle を使って以下のような活動が行われた。(1) マップの各部分を英訳するためにフォーラムでの議論、(2) できあがったマップ英語版をコースにアップロードし、全員で共有して意見交換、(3) 日米共同合宿の前にオンライン上で事前研修やグループ内意見交換、(4) 合宿中に石川県立大学において2ヶ国語で行われるプロジェクト発表会の原稿作成、(5) 完成したマップ原稿の共有などである。これらの各段階において、Moodle 上に作った Map Project コースで学生たちは常に情報を交換し、また共有することができた。

具体的には、表1に示した流れで9月末から2月末にかけて、細かな段階を経て Map Project は実施された。つまり、9月にまず教員がこの二つの地区をまわって事前学習会を行い、続いて10月に参加予定の学生たちの事前学習会を実施し、直後に学生たちにマップ英訳の方法を説明し、分担箇所を示した。11月から12月には、日米の学生でそれぞれが担当するマップ説明の英訳を行い、それを Moodle 上に提出してもらった。そして、最後に1月に教員が加わり全体のチェックを行った。英訳マップが完成すると同時に、2月に実施する合宿の準備に入り、数回の学生との準備ミーティングを経て、公開プロジェクト発表会を含む合宿が行われた。

表1 日米 Map Project の流れ

時期	活動
9月	マッププロジェクト担当教員の野々市、鶴来の事前学習会
10月	学生のための野々市・鶴来のまち歩き事前学習会
11月	日米の学生間で英訳についてのMoodle上のやりとり開始
12月下旬	マップ英訳原稿完成、教員の校正
1月	教員、地元協力者による原稿の校正
	Map Project 合宿・発表会準備ミーティング
2月	Map Project 合宿・発表会準備ミーティング
	Map Project 合宿 (2/26-2/28)

3. 英訳に使用した地図

前述したように、今回英訳に取り組んだのは野々市市本町地区と、白山市鶴来地区の2か所の地図である。

野々市市については、「ボランティアガイドのいち里まち倶楽部」との協力で進められた。まちあるきマップは、プロジェクトが始まった時点ではまだなく、同倶楽部内でマップ作成への希望が語られただけであった。そのため、このプロジェクトを一つのきっかけとして、またプロジェクトの予定に間に合わせるように急ピッチで日本語のまち歩きマップが作成された。

日本語版マップはその後、このプロジェクトを通して英訳された。英訳したマップは、図1の野々市市の観光名所の一つである、野々市市本町地区の地図とのついで（コミュニティバス）の運行ルートを含めた広域の地図の二枚である。

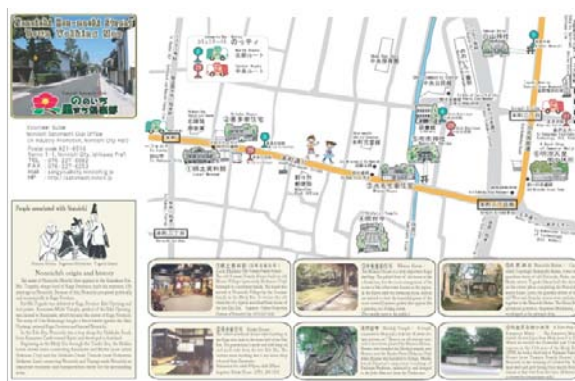


図1 野々市市本町地区の英訳マップ



図2 白山市鶴来地区の英訳マップ

鶴来については、県観光マイスターである辻貴宏氏の協力を受け、「まちの駅獅子の里つぎ推進協議会事務局（鶴来商工会内）」が出している「獅子の里つぎ」という日本語版のマップを英訳することにした。このマップは3枚から構成されている。

参加学生は、野々市のマップに取り組む野々市グループ20名と、鶴来のマップに取り組む鶴来25名に分かれて、それぞれの分担箇所についてパートナーと二人で英訳作業を行った。

4. 活動の概要

4.1 オンライン(Moodle)上でのマップ英訳活動

学生たちの英訳活動が始まる前に、教員側で野々市と鶴来の地図を細かなパートに分け、日本人学生1名とアメリカ人学生1名の2名で各部分の英訳に取り組ませることにした。

まず、各部分を日本人学生がアメリカ人学生に意味が分かるように、自分のできる範囲で英語に訳し、それを Moodle 上の掲示板で自分のパートナーに伝える(図3)。アメリカ人学生は、意味の分からない部分を日本人学生に質問したり、意味や背景を確認したりしながら、少しずつより分かりやすく自然な英語になるように二人で文章を作っていく。12月末には、学生たちで作った完成原稿を Moodle 上に提出してもらい、冬休みに教員がチェックを行った。

RHIT-IPU Map Project

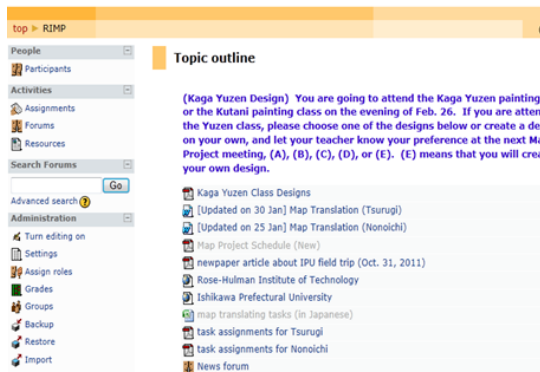


図3 Moodle上の掲示板

チェックの過程で分かったことは、一つひとつの部分が、ある程度英語として整っていても、全体として見ると統一されていない部分や、学生たちのリサーチが不十分なために地名の読み間違いや意味の取り違いなどがかなり残っていたということである。これを地元の協力者の情報提供も受けて、日米の教員で何度もチェックし訂正を行ったのち、冬休み明けに再度最終版として再びMoodleにアップロードし、学生たちに最終英訳版を確認してもらった。

このプロセスを経て、1月末に両地域に送って、それぞれ地図に文字を埋め込む作業が行われた。この時点でさらに文字数やレイアウトなどの点で工夫やチェックが必要で、何度も教員を中心として推敲が行われた。こうして完成したマップは日米合同合宿で学生たちから各地区の代表者に贈呈され、それを使って学生たちのまち歩きが行われた。

4.2 日米合同合宿

日米合同合宿は、2012年2月26日から28日にかけて、3日間にわたって行われた。具体的には、学生たちの文化活動（アイスブレイキング活動、和太鼓体験教室、加賀友禅教室、九谷絵付け教室）、完成した地図のお披露目と贈呈式（そのリハーサルも含む）、自分たちがマップ作りに取り組んだ場所を訪れるフィールドワークなど、非常にたくさんの活動を盛り込んで計画された。

合宿1日目の朝、学生たちはみんな緊張している様子であったが、日本人学生有志のりにより、さまざま



図4 アイスブレイキング活動

なアイスブレイキング活動を行ううち、あっという間に打ち解けて仲良くなった（図4）。2年前の合宿の時は、教員主導でさまざまな活動をしようとして、なかなかうまく行かないことがあったが、今回は学生主導ということ 키워ドにした結果、全体の活動がよりスムーズに進行し、さらに学生たち自身が学ぶことも多かったように思う。

2日目の午後は、小グループで金沢観光に行く予定になっていた。この時どこに行くかについても、先に設定した観光グループ別にMoodle上で話し合いが行われ、当日は兼六園・金沢城公園、近江町市場、東茶屋街、忍者寺など、各グループで決めた観光ルートに従って活動が行われた。各グループは、観光地を回り、食事を取り、プリクラやカラオケなど日本の若者が楽しむのと同じようなものを楽しんで、はじけるような笑顔で研修センターに帰ってきた。金沢観光を自由に行ってからは、緊張が解けて学生たちが本当に元気になる、それぞれが自分で話しかけ、様々な活動を通して、とても能動的に動くようになったと感じられた。

5. 日米Map Project発表会とフィールドワーク

合同合宿の準備をしているときに、このマップ英訳活動をプロジェクト発表会として一般に公開しようということが提案された（図5）。地域の多くの方々との共同によって進められていたためであり、作られたマップは今後両地域で使われることも期待されたためである。発表会に向けて、プログラムやポスターを作り、合宿前に日本人学生だけで3回リハーサルを行った。最初は下を向いていたり、原稿を棒読みしたり、漢字の読み方を間違えたりする学生もいたが、リハーサルを重ねるうちに、お互いのプレゼンを見てコメントを交換し、少しずつより分かりやすく、聞き手にアピールする発表ができるようになった。

各大学でそれぞれにリハーサルを行っていたが、合宿の1日目に日米合同のリハーサルが開催された。発表会では教員だけでなく地域の方々に聞いてもらうため、日本語と英語の両方で行うこととした。英語話者から日本語話者、そしてまた英語話者への転換がスムーズにできるように両校の学生で練習をした。この発表会では司会もすべて学生たちが担当しており、発表会が学生だけで行われたことは、学生たちの達成感やプロジェクト全体の成果としても大きいものがあった。

発表会には、石川県立大学学長をはじめ学内教職員に加えて、野々市と鶴来の地元住民、市役所職員、学生の保護者、一般市民等が出席した。学生たちのプレゼンテーションは教員の予想を上回る出来で、学生たち自身のチーム

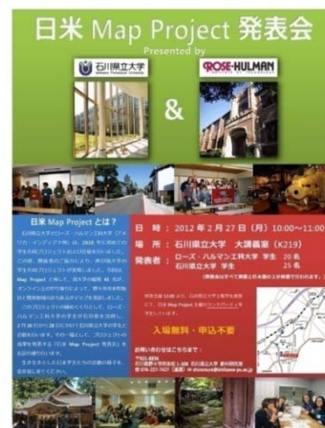


図5 発表会ポスター

としての達成感も非常に大きいものがあったことが見ていても分かった。発表が行われた後、贈呈式を行い、完成したマップのパネルがののいち里まち倶楽部会長と県観光マイスターに贈呈された。このパネルは現在、両地域で展示されている。

学生たちは、翌日の午前に自分たちが担当したマップによって、野々市グループと鶴来グループに分かれて、フィールドワークを行った。この頃には、全員が非常に打ち解け、どの場所でもとても賑やかに会話をする姿が見られた。

6. 学生たちの感想とプロジェクトの成果

閉会式後に学生たちが書いた感想は、彼らがこの3日間に受けた感動や発見にあふれていた。A4の用紙1ページいっぱいコメントを書いた学生が多く、裏面にも続けて書いた学生もいた。

その感想は、例えば次のようなものである。

- ▶ 元々海外には興味がありましたが、今回実施に交流を行ってさらに海外に興味を持ちました。言葉が通じなくても、笑い合い助け合い、絆を結ぶことができ、遠い国の彼らと出会えたことは、私にとって言葉では表わせないほどたくさんの喜びや発見に満ち溢れた経験になりました。しかし、やはりもう少し言葉が通じたらなあ、と思うことも多々あったので、英語をもっと勉強したいと思いました。
- ▶ 英語の表現力や単語はまだまだ貧しいのですが、このプロジェクトを期に、様々なプロジェクトや英語に触れることを積極的に行いたいと思います。また、もっともっとコミュニケーションがとれるように基礎をしっかり固めたいと思います。

このプロジェクトでは、合宿後半に見られた学生たちの積極的な姿勢に、教員の方も「教える」ということについて大きな学びがあったと思う。完全に決められたプログラムに乗って活動することによって、少しずつコミュニケーション活動に慣れた学生たちも、自由行動に入って、一気に積極的になり、各自が考えながら動き、話すようになったからである。

また、多くの学生たちが自分の英語力の認識と今後への動機づけがされたことも大きな成果の一つである。さらに、今回のプロジェクトでは、こういう学びに加えて、彼らの社会貢献への気づきがあった。日米学生が助け合って作成したマップ英語版を、各地区に贈呈し、人々に喜んでもらえたという満足感が残ったことが、特に貴重なことであったと思う。

7. おわりにー結論

今回の日米 Map Project は、e-Learning システムを利用した学習であり、異文化間交流であったが、さらに、これに社会貢献という要素を加えたことにより、学習に真正性を与えることができたと考えられる。すなわち、練習としての英語学習や表面的な日本文化の学習ではなく、社会で使いものになるマップという成果物を仕上げなければいけないというタスクは、責任が伴う。学生達はその責任をどの程度理解していたかは定かではないが、日本文化をあまり知らないアメリカ人学生と、英語が得意とは言えない日本人学生が、アメ

リカには同じものがないが日本には実際にある、あるいはあった物事について、適切な英単語、英文を探す作業は、必然的に双方でやりとりが求められた。さらに、日本で行われた合宿によって、アメリカ人学生達は現物に触れることも可能となり、事前に Moodle を通して、何度も想像したであろうものの「正解」を知ることが興味深い活動であったと思われる。日本人学生達はアメリカ人学生に両地区を案内してまわったが、それ以前の Moodle 上での活動なしにはできなかったと思われる。つまり、それまでに何度も考えてきた事柄であり、英訳であったために、自然と覚えていることもあったと思われ、片言ながらも案内することができていたようである。

また、社会貢献という要素により社会で役に立つという達成感を味わうことも可能であった。ののいち里まち倶楽部では、学生達との活動をその時々 HP で公開しており、地図もダウンロードできるようになっている。このプロジェクトを通して作成されたマップは野々市市ではすでに国際交流事業等でも使われており、鶴来地区でも現在印刷が模索されている。

このような長期間にわたる作業によってなされる社会貢献の場合、e-Learning システムの果たす役割は大きいといえる。今回のプロジェクトでは、日米の学生達が出会うまでの約4ヶ月間にわたって Moodle のコースを通じて交流し、作業をしてきた。このような作業を通じて異文化間コミュニケーションを取りながら、お互いについて学び、共に作業をする機会を持つことができた。合宿前に一つの目標に向かって共に努力したので、チームとしての意識も芽生え、さらに、合宿開始後は、マップの英語版という共同で創りあげた作品があったので、発表会や地域へのフィールドワークへの活動への移行が非常にスムーズに行われ、そのことが学生たちの達成感が高い充実したプロジェクトになった主な要因だと考えている。短期合宿のみの3、4日だけでは到底なしえない活動であり、e-Learning システムの活用方法の一つのあり方として有効であると思われる。

本取り組みは、2012年度の石川県立大学「教育改善プロジェクト」として採択され、実施されたものである。

参考文献

- (1) 新村知子：“平成21年教育改善プロジェクト報告 英語ってホントに使える言葉やったんや！ーアメリカ人学生とのメッセージ交換から得た学生一人ひとりの学びー” (2010)